



QOLが導く地域の未来

米沢中央高等学校 二年

佐藤 遥佳

日本全体で少子高齢化が進む中、都会への人口集中は地方の人口減少を加速させている。私が住む山形県置賜地区でも、二〇五〇年には人口が三十五パーセント減少するとされ、地域の存続が危ぶまれる状況である。山形県では、進学や就職を機に県外へ出る若者の流出が大きな要因となっている。私自身も、学びたい学問を求めて県外の大学への進学を希望している。私は将来、法学部に進学し、法律の知識を活かして人の役に立ちたいという思いがある。山形県内には自分の目標にあった学びの場が少なく、専門性を高めるには県外で学ぶ必要があると考えている。

だからこそ重要なのは「一度地元を離れても、また戻ってきたい」と思えるような地域づくりだと思う。私は、QOL（生活の質）の高さを活かして、インターン、Uターン人口を増やすことが、持続可能な地域社会につながると思える。

東京では生活費が高く、家賃や交通費などの経済的負担に加え、人口密度や交通混雑によるストレスも大きい。働きながら子育てする環境としては、必ずしも理想的とは言えない。一方、山形のような地方では、自然に囲まれた落ち着いた環境や、新鮮な食材、広くゆとりのある住まいが得られ、QOLの高い暮らしが実現できる。

実現に向け私が考える支援策は二つある。一つ目は、米沢の地域特性を活かした子育て環境の整備である。四季の変化、美味しい食文化、歴史や伝統が息づく米沢ならではの環境を活かし、子どもたちが自然や地域社会と関わりながら育つ仕組みを作ることは、都市にはない価値を提供できると感じている。私自身、町内の会の芋煮会やお祭りで神輿を担いだ記憶があり、地域とのつながりを強く感じた経験がある。こうした体験

こそが、QOLの高さにつながっていると思う。一つ目は、転職支援の強化である。地方では終身雇用の意識が根強く、新たに来た人にとって働き始めるまでのハードルが高いのが現実である。行政と企業が協力し、移住者のスキルに応じた職場の紹介と、就職後の生活や人間関係への寄り添いが重要だと思う。安心して暮らし、働ける環境こそがQOLを支える土台である。

私は将来、法律を学んだ知識を活かして、地域に関する制度づくりや暮らしやすい社会の仕組みに関わりたいと考えている。たとえば、移住者支援や子育て制度の整備など、法的な視点から地域をサポートする活動に携わりたい。そのためにも、一度外に出て視野を広げ、学んだことを地元に戻元していきたい。

たとえ進学で県外に出たとしても、「米沢の豊かな環境で育ててもらったから今の自分がある」という気持ち忘れずに、ふるさとのQOLをさらに高める担い手になりたいと心から思っている。